

島根町 わがとこ聞きある記

戦争中の暮らしと戦後の町の移り変わり



島根地区歴史書編集委員会



発刊によせて

島根町では昭和56年(1981)に資料編、昭和62年(1987)に本編と、町の歴史をつづった「島根町誌」が発刊されました。「島根町誌」には町内の様々な事柄が記録されています。

この「島根町 わがところ聞きある記」は島根町誌ではあまりふれられていない昭和16年(1941)から始まる太平洋戦争当時の町の人々の暮らしと戦後から今に続く町の移り変わりを、町内の方々にお話しいただき、まとめたものです。

「戦争体験」では、今では考えられない苦しい暮らしの話の中から、平和の大切さをあらためて知ってもらえればと思います。

「島根町の歴史」では、戦後から現在までの町の産業・交通・暮らしなどの移り変る様子を記しています。

本文中には小中学生の方には理解しにくい言葉が出てくるかもしれません。また、紙面の関係で詳しく解説していない事柄も多くあります。

疑問に思ったところは、ぜひ、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんに聞いてみてください。そうすれば今とは違う島根町の様子や人々の暮らしの話が聞けるかもしれません。また先にあげた「島根町誌」を開いて見ると新しい発見があるかもしれません。

私たちの住む町、島根町は雄大な日本海と緑豊かな山々に囲まれた美しい町です。また、島根町にはすばらしい名所、旧跡も多くあります。

この本を通して、私たちの住む町「島根町」によりいっそうの愛着をもっていただけたら幸いです。

「島根町 わがところ聞きある記」の編集に際し、ご協力いただいた皆様に感謝し、お礼申し上げます。

目 次

発刊によせて

1. 戦争中の暮らし

衣（着るもの 身につけるもの）について	1
食（食べること、食べ物）について	2
住（生活）について	4
生活（こどもの遊び）について	5
その他	6
【写真】 戦中・戦後の品々	7

2. 戦後の町の移り変わり

昭和20年代	8
昭和30年代	10
昭和40年代	12
昭和50年代	14
平成の時代	15

3. 島根町の先人たち

17

島根町の名所

1. 戦争中の暮らし

(1) 衣（着るもの 身につけるもの）について

昭和16年(1941)から約4年間続いた太平洋戦争。食べるものも着るものも少なくなっていく中で、この町の人たちはどんな暮らしをしていたのでしょうか。

戦争がはじまり戦禍が厳しくなると、女性は、下はモンペ、上は着物を短くしたものやブラウスなどを着て、頭には防空頭巾をかぶりました。

若い女性も派手な服装は慎み、化粧もしません。男性は国防色というカーキ色の上下の服を着て戦闘帽をかぶり、足には「巻ききやはん」を巻きました。学校に通う男の子もほとんど同じで、女の子はセーラー服にモンペ姿です。学校から帰るとすぐ着替えて(大切な服だからです)手伝いをしました。新しいものはほとんどなく、お兄さん・お姉さんのお下がりや、近所や親戚などの年長の人のお古、そして破れたところなどは繕って着ました。

服を作るのにも布がないので、着物をといて作り、セーラー服などはおじいさんの黒い着物から作ったりしました。町内にも何人か仕立てをする人がいたので、作ってもらいましたが、簡単な物は自分で手作りする人もいました。そして、教材を入れるかばんも手作りの袋や風呂敷でした。体育のユニフォームやパンツは普通の古いズボンを短く切り、悪いところは直して学校に持って行き、みんな、同じ色に染めてもらいました。(野波)

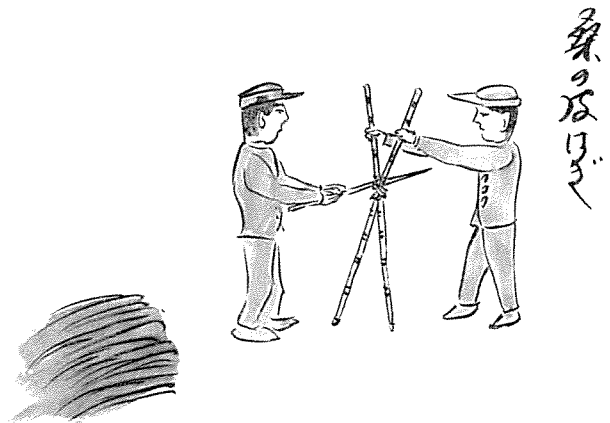
布を作る繊維が不足しているので、繊維にできる桑の木の皮を剥いだり(さし絵)、道端に生えているラミーとムシロ(イラクサの仲間)の皮を剥いで供出しました。

履物は主に、わらぞうり、竹皮ぞうりを履き、ゴムぞうり、下駄、短靴(ゴム製)なども

履いていました。わらぞうりはすぐダメになるので、裏にゴムを貼っている人もいました。雪の日は長靴や短靴は手に入りにくいので穴があくとゴムを貼って直して履きました。雪だけの日には、雪が入りにくいわらで作った「こもぐつ」を履く人もいました。(大芦)

学校では時々、短靴などの配給があり抽選で分け、次の時は、前回当たった人以外の人で抽選をしました。

総合切符制というものがありませんでしたが、切符があっても物がなかったので、今ある物を大事に長持ちさせて使い「ほしがりません 勝つまでは」を合言葉に、不自由な生活をみんなで支えあいました。



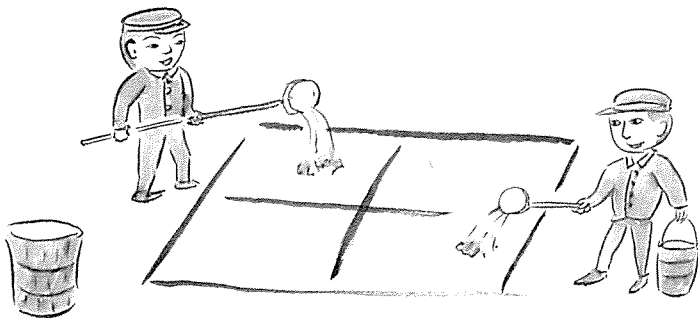
(2) 食（食べること、食べ物）について

戦争が長引くと、物資が不足してしまいました。砂糖やマッチ、米の配給制がおこなわれ、お米は7分づきが主で大人1人1日あたり2合3勺(330グラム)に決められました。(8歳未満と70歳以上は2合)昭和18年(1943)以降はさらに厳しくなり他の穀物(麦など)が配給されるようになりました。

農家は米をほとんど供出しなければなりません。米も麦も十分ではないのでご飯はさつま芋や蕎麦、あらめ、大豆などを混ぜて炊いた水分の多い雑炊でお腹をいっぱいにし、朝は団子汁を食べる家も多くありました。

水分が多いと弁当に入れて学校に持って行かれないので、昼食時間を長くして、家に帰って食べるようにした学校もありました。食べ終えたらまた学校にもどらなければなりません。

塩田



校庭ではさつま芋や大豆を育て、塩も配給制になったので、校庭でも塩田(さし絵)を作りました。児童、生徒も手伝います。芋も今のようなくおいしなものではなく、大きく育つ品種が配られました。味より量です。さつま芋は茹でる、蒸かす、煮る、干して粉にするなどしている

いろと使えました。また、砂糖がなかなか買えないので芋飴を作ったり、戦後は砂糖の代用としてサッカリン(人工甘味料)も使いました。

家に帰ってからも遊びをかねて、山野草や木の実を採って、おやつにしたり、売って小遣いにしたり、また、家の食料の足しにもしました。子どもたちのおやつは買ったものはあまりなく、家で作った焼き米をポケットに入れて持ち歩いたり(さし絵)、梅漬けの竹皮包みのように工夫したものもありました。物が買えない時代でしたので、自然にあるものを食べ、たくさん採れたものは干したり塩漬けなどに加工し、年中食べられるようにしました。この頃は冷蔵庫や、保温するジャーがないので夏はご飯がいたまないように、飯ぞうき(めしかご)に入れて涼しいところにぶら下げたりしました。冬は冷たいので蒸かして食べ、煮炊きは土間につくられたかまどや、囲炉裏でしました。

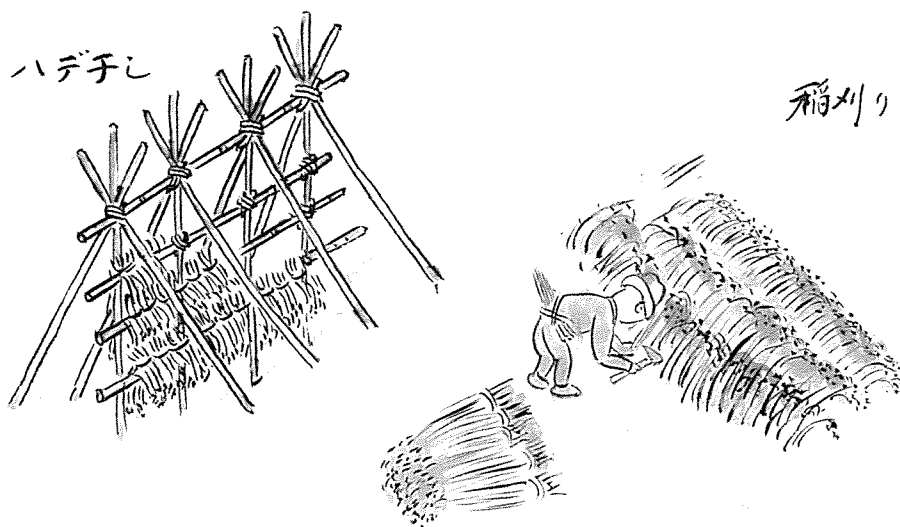
おやつ焼き米入



食について

春	わらび・ぜんまい・ ^{ふき} 蒟・竹の子・つわぶき・いたどり わかめ・そぞ・あらめ・田ニシ
夏	桑の実・山桃・びわ・グミ・野いちご・川いちじく・のびる なんばぎん(とうもろこし)・ ^{すいか} 西瓜・ ^{うり} 瓜・ ^{なつたまめ} 夏豆(^{そらまめ} 空豆) うみしか・いそぎんちゃく・かんばい・川ニナ・うなぎ・モボシ(すずめだい) べら・もずく
秋	^{くり} 栗・ ^{かき} 柿・ ^{いも} ビ(ビビ)・タナゴ・山ぶどう・ ^{むく} 棕の実・ ^え 榎の実・ ^{しい} 椎の実 さつま芋・あけび・きのこ・いなご・川がに
冬	なまこ・ ^{のり} 海苔・ ^{じんば} 神葉・ ^ほ 干し柿・ ^{がき} 干し大根・ ^ほ 干しいも・ ^{うさぎ} ワナにかかった兎 すずめ
ご飯	^{むぎめし} 麦飯・ ^{いもめし} 芋飯・ ^{ふきめし} 蒟飯・ ^{だいずめし} 大豆飯・ ^{あらめめし} 荒布飯・ ^{だんご} 団子・ ^{ぞうすい} 雑炊・ ^{だんごじる} 団子汁
その他	^{うめづ} 梅漬け・ ^{こうせん} 香煎・ ^{さとう} 砂糖打ち(炒り米)・ ^い 流し焼き・ ^{やまぶき} 焼き米・ ^{ぬかつ} 山露の糠漬け ^{いもあめ} 芋飴・ ^{むぎあめ} 麦飴・ねぼし・ねーこ・ ^{いも} 芋の ^{こなだんご} 粉団子 ^{しお} 塩(学校にも ^{えんでん} 塩田がありました) ^{しょうゆ} しょうゆ・ ^{みそ} 味噌・ ^{かたくりこ} 片栗粉・お茶 ^{にぼし} 煮干(天日干し)・ ^{めざ} 目刺し・スルメ さつま芋は芋釜にもみがらを敷き、その中に芋を入れると長期保存ができました。

今ではなかなか食べない物もあります。いろいろ工夫して食べていました。



(3) 住（生活）について

昔の家はすき間が多く風が入りやすいため、冬は寒かったのですが、夏は涼しく開け放してくらしていました。しかし雨が降ると雨戸を閉めるので、家の中は暗くなります。家の鍵をかけるところは、ほとんどありませんでした。

電灯も数が多くないので、それを移動させて使っていましたが、停電が多いので、ランプやローソクも使いました。戦争中は空襲警報のサイレンが鳴ると、近くの防空壕に入ったり電灯に黒い布をかぶせ(灯下管制)外に灯りが漏れないようにして生活しなければなりませんでした。

冬は、囲炉裏、こたつ(掘りこたつ・猫こたつ)、火鉢、湯タンポなどで暖をとりました。夏はうちわを使い、庭や玄関先などに打ち水をして涼しくし、寝る時は蚊帳を吊りその中で寝ました。

掃除はハタキをかけ、箒で掃き、雑巾で拭くやり方です。洗濯は共同井戸や川でしました。手で洗いにくい大きなものは、川の平らな石の上に置いて、足を使って洗いました。夏になると着物をほどき、洗い貼り(洗ったのを板に貼って干す)をしたり、布団は家でといて綿を入れ替えたりしました。

炊事は、かまどや囲炉裏、七輪で煮炊きをしました。そのためには薪や炭が必要です。子どもたちはみんな、薪作り、炭焼き、山の雑木集めや流木集めを手伝い、集めた木は軒先や木小屋に積んでおきました。また、水道がないので台所の「はんど」(大きな水がめ)に水をためて使用し、食器を井戸で洗ったり、野菜などは川で洗ったりしました。灰を洗剤として使うこともありました。

トイレは掘りつぼに2枚の板を渡したもので、今のようなトイレットペーパーもなく、代わりに新聞紙や古い本の紙を使いました。汲んだ糞尿は畑のつぼに入れ、肥料にしました。

農家では牛を飼っている家も多く、牛糞も肥料にしました。牛は母屋のすぐ近くで飼っていただけで、ハエに悩まされることもありました。しかし、牛は田んぼを耕したり、荷車を引かせたりする大切な家畜でした。

風呂がない家も多く、近所や親戚で「もらい風呂」をしました。風呂の水を汲んだり薪で沸かししたりするのは学校から帰ってからの子どもたちの仕事でした。

乗り物はガソリンが少なくなってきたので、バスなどは木炭車に変わりました。15センチメートルくらいに切った木を釜に入れ、燃やして走りましたが、力が弱く、坂になると客もバスから降りて後ろから押して動かしたりしました。荷物を運ぶときは、人が引いたり押したりする大八車を使いました。

(4) 生活（こどもの遊び）について

昭和16年(1941)4月から尋常高等小学校が国民学校に変わりました。登下校するときには天皇、皇后両陛下の御真影(写真)が納められている奉安殿に正対して最敬礼しました。

召集令状が役場から該当者に届くと、武運長久必勝の祈願祭が氏神様で行われ、村の人や子どもたちが参列しました。

そして入隊の日には集落をあげて日の丸の旗をふり、村の境まで見送りに行きました。

また、遺骨迎えも子どもたち全員が参加しました。出征兵士がおられる家には、子どもたちは男女を問わず手伝いに行きました。力仕事をしたり、山や空き地の開墾をして、その土地には大豆や芋を植えました。



戦争が長引くと輸入している油が足りなくなり、その代用品として松の根で油(松根油)が作られました。重い薪を運び、根を煮て油を作りました。

戦時中も戦後も手伝いの合間には遊びもたくさんしました。上級生も下級生もいっしょになって遊び、海や川の魚や貝、山の自然の果物、山菜などを採ったりしました。すずめの卵や雛(害鳥)を地区の会長のところへ持って行くとお金がもらえました。鳥もちを作って鳥をつかまえたり、ワナをかけて兎をつかまえたりしましたが、これらは貴重な食料であり収入源でした。

冬休みに藁仕事(縄・ぞうり作り)をして、それを学校へ持って行くと、数や長さを競うコンクールがあり優秀作には賞がもらえました。

遊びにもいろいろあり、兵隊ごっこ、騎馬戦、頭なで、川数珠とり、お手玉、おはじき、竹鉄砲、将棋、べったん、ゴム粘土とり、ビー玉、こま、竹とんぼ、竹馬などで遊び、七夕祭りもありました。また、手切り、しば鬼、いたどりの水車、けんぱ、ちょうれん、釘立てなどの遊びもありました。

弟や妹、近所の子どもの子守りをしながら、風呂や「はんど」に井戸から水を汲み、そのあとで遊びました。学校の登下校や遊びのときに飛行機の爆音がしたり機体が見えたりすると、物陰や、溝などに身を隠し飛行機が通り過ぎるのを待ちました。

(5) その他

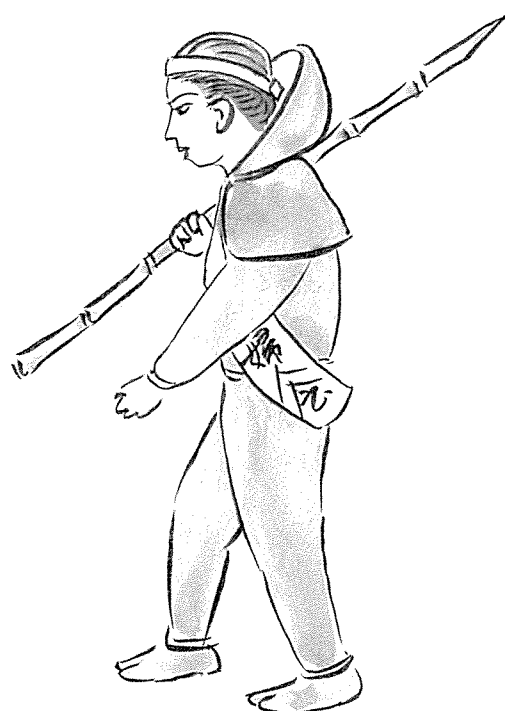
婦人会では、国防婦人会などが結成され、竹槍訓練や防火訓練が行われました。竹槍は
神社で拝んでもらい、その槍にお札を貼りました。

防火訓練では川から水を汲んで、バケツリレーの練習がありました。

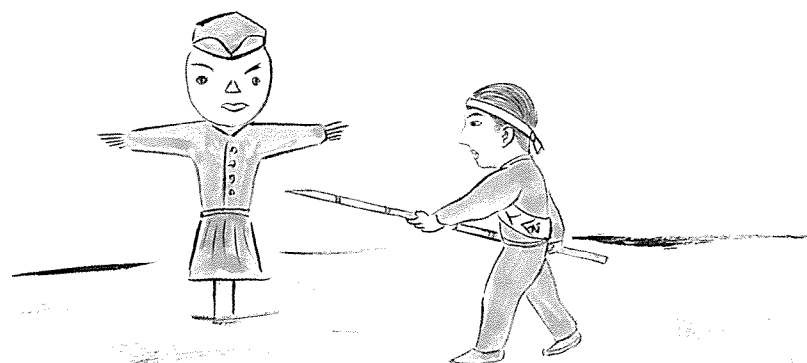
防火訓練



国防婦人会



竹槍訓練



戦中・戦後の品々

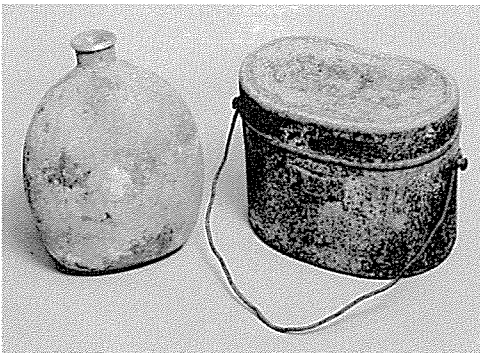


こくほうふく
国防服

(戦争中は兵隊の軍服に似たものを一般人も着用しました)



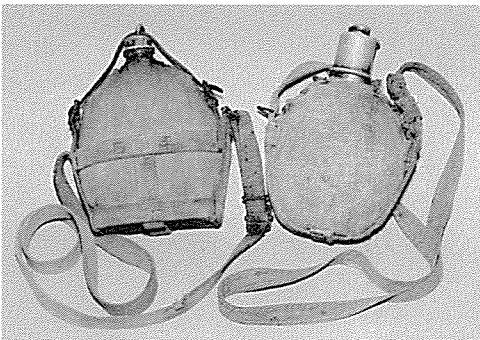
はいのう
背囊 (今のリュックサックのようなもの)



すいとう はん
水筒と飯ごう



ぎつのう
雑囊 (戦争中に使われたカバン)



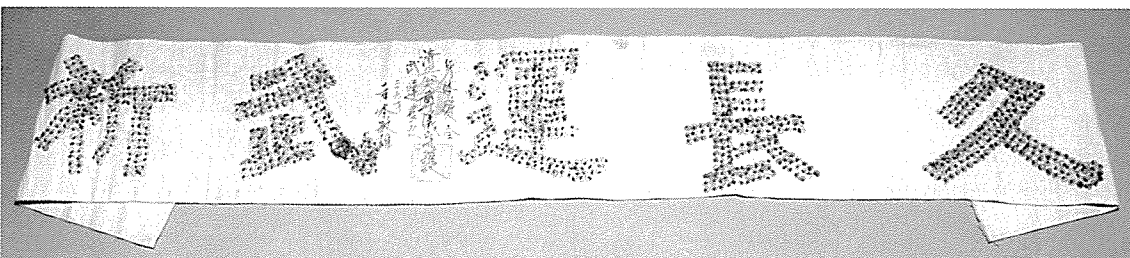
すいとう
水筒

せんになはり
千人針

(出兵した人が無事帰ってくるようタマよけの腹巻として
祈りを込めて赤い糸で一針一針結び縫いしたもの)



足なか (短いぞうり)



2. 戦後の町の移り変わり ～島根町の歴史～

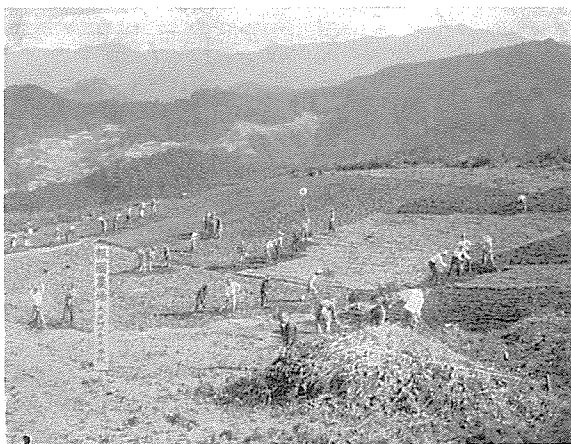
(1) 昭和20年代

昭和20年(1945)終戦を迎えた日本。私たちの町、島根町はこの頃どのような暮らしだったのでしょうか。私たちが暮らす島根町の昭和20年代から平成の時代への移り変わりを見てみましょう。

【苦労の多かった農業】

山は開墾され耕地となり、山頂の方まで耕やされ段々畑が続いていました。麦やサツマイモを栽培していましたが、収穫には段々畑の急斜面をすべて人の力で運搬しなければならず大変な苦労がありました。

戦後は食糧難で、主にイモが栽培され、松江から物々交換や買い求めに来る人もいました。戦地から帰った男性が中心となって農地が整備され、米や麦も多く作られるようになりました。また、油桐の実から採れる油も貴重な収入源でした。



大芦の市原牧場の開墾



すみやかま炭焼釜にて（大碕神社付近）

【漁業・手漕ぎから船外機へ】

町の漁業は比較的小さな規模のもの(かなぎ漁・一本釣り・海苔つみ)でしたが、やがてそれまでの手漕ぎ船から船外機の普及と動力船の大型化によって沖合まで漁に出かけられるようになりました。

イワシの豊漁が続き、加工場が作られたのもこの頃です。

美保関町の片江船団や商船で県外に働きに

出かける人も多く、その「船乗りさん」が帰ってきたときは町は大いににぎわいました。



沖泊の乾燥小屋

イモ・ワカメなどの乾燥に利用されていました

【不便だった町内の交通】

昭和20年代前半は海上輸送と比べ陸上交通は不便でした。道路は整備されておらず松江へ行くには山を徒歩で越えなければなりません。ですから大芦・加賀からは、運搬船に乗って佐陀川経由で松江に出たり、野波からは美保関町方面へ船で行き、その後バスや徒歩で松江へ向かうなど大変な時間がかかりました。

町内では馬車も見られ、昭和20年代後半までは木炭バスも走っていました。



加賀築港（昭和20年代）

【くらし・文化】

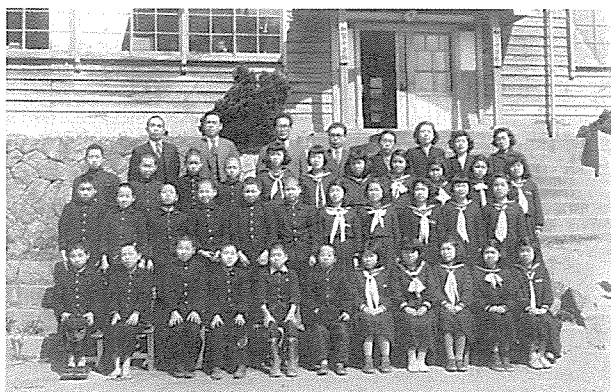
集落内同士の結婚が多く、家庭の子どもは3～4人以上で、農繁期にはその時期だけの季節保育所が開設されていました。またこの時期、小・中学校は手伝いのため5～7日間休みになる（農繁休暇）など家族総出で収穫をしていました。

青年団・婦人会などの団体活動が盛んになり演芸会（敬老会）が毎年実施され、明るい話題と楽しみを提供していました。

また、この頃から野球が盛んになり、後に島根町の町技となるバスケットボールなどもしだいに行われるようになりました。



演芸会



昭和29年3月加賀小学校にて



祭の様子

(2) 昭和30年代 ～大芦・加賀・野波 3村合併で島根村へ～

昭和30年代は戦後10年を経て日本全体が「夢」を持ち出した時代と言えるかもしれません。

昭和31年(1956)1月10日、島根町の前身である島根村は、大芦村・加賀村・野波村の3つの村が合併し誕生しました。新しい村ができた当時の人口は6,438人でした。

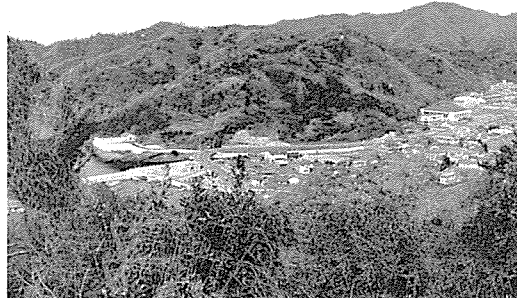
ところで、みなさんは「島根町」の名前の由来をご存知ですか。合併で新しくできた島根町の名は、出雲国風土記に記されている「島根郡」がこの地方にあたることと、島根半島の中心部であることから名づけられました。

【盛んだった農業】

昭和30年代に入っても町内の農業は盛んに行われていました。当時は農業を継ぐ人も多く山の段々畑も多く残り、山は子どもたちの遊び場の1つでした。日本は高度経済成長の時代を迎え、家も多く建てられ木材が売れるようになったため林業が盛んになり、町内にもいくつかの製材所ができました。昭和30年代後半までは養蚕も盛んで桑畑も多くありました。



昭和33年(1958)の加賀岩木地区
山の上まで畑が続いている



現在の加賀岩木地区
山はすっかり木々に被われている

【発展する漁業】

大芦で最初に四ッ張り網から箕網へと漁法が変わり、イワシ漁で賑わいました。発電機などの機械も使われるようになり、夜の漁(イカ・イワシ漁)も盛んに行われるようになってきました。



昭和32年(1957)頃 大芦の浜でのイワシ干しの様子

【便利になっていく町の交通】

県道千酌鹿島松江線野波道路(現在のチェリーロード)ができるまでは、野波～加賀間の交通は村営の連絡船「島根丸」が就航していました。4月～10月の期間に1日3往復運航され、料金は16歳以上が50円でした。



島根丸

昭和30年代初め、町内の交通は大芦と鹿島町御津の間でバスが通っていましたが、同じ町内の野波と加賀の間は詰坂山があり、この山道を通して交流するしかありませんでした。

【詰坂山】 野波から役場のある加賀まで行くには昔は詰坂山の「犬道」とか「嶮道」と言っただけで1メートル幅ほどの山道を1時間半かけて歩いて越えなければなりません。ちなみに「詰坂山」の「詰」はこの道が爪をたてて登らなければ行けないような急な坂道だったことからこのように名付けられたと言われています。



開通間もない頃の県道千酌鹿島松江線
(チェリーロード)

昭和36年(1961)、念願だった加賀～野波間を結ぶ道路が開通しバスが通るようになりました。この道路の完成を祝い、昭和39年春、松江市に住む島根町出身の人たちが桜の苗木500本を寄贈、これを地元の人たちが植樹し、現在のチェリーロードになりました。

この道路の開通によって地区外で働く人が増えバイクやスクーターを持つ人が多くなりました。

【進学する人が増えた時代】

昭和30年代後半からは進学する人が多くなりましたが、まだまだ交通の便が悪かったため、高校へ進学して、松江市内に下宿する人がたくさんいました。また都会で就職する人も増えてきました。



昭和35年頃 運動会での保育園遊戯

(3) 昭和40年代 ～変わる人々の暮らし・港・町の風景～

昭和44年(1969)「島根村」は「島根町」になり、町章・町民憲章・町歌が作られました。

【変わる町の姿】

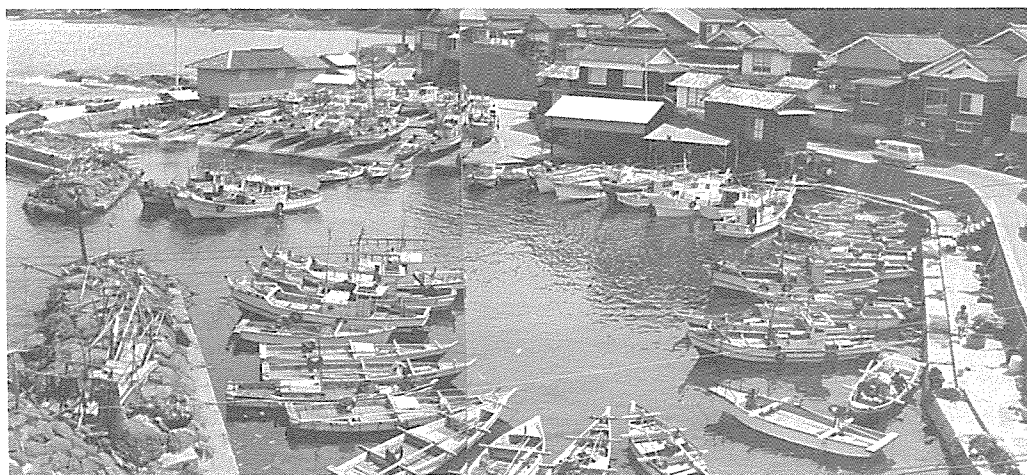
日本海が複雑に入り組む島根町には、8つの港があります。昭和40年に入ってから、これらの港の整備が進められました。防波堤の設置、海岸道路の整備など島根町の風景が一番変わった時代です。

【漁業・整備が進む港】

昭和40年代前半にはイタヤ貝の豊漁が続き、浜は明るい空気に満ちていました。生活に余裕が感じられた頃です。島根町の特産であるワカメの養殖をはじめ養殖漁業が盛んになり、獲る漁業から育てる漁業へと発展したのもこの頃からです。

漁港の整備とともに漁船は大型化しました。昭和30年代初めは1トンクラスの和船が中心でしたが、現在ではディーゼルエンジンを積んだ10トンクラスが多くなっています。

港の整備と対照的に、漁業をする人は減少し、現在、漁業従事者は約200人。一番多かったときと比べると約1/3になりました。(漁業従事者は昭和30年には764人いました。)



野井漁港

【農業・林業】

農業ではテラーなどの機械化が進み、圃場整備が始められましたが、日本全体が高度経済成長によって働く場が増え、農業をやめて勤めに出る人も多くなっていきます。

昭和52年からは地籍調査(土地について、所有者、地番、地目を調査し、土地の境界と面積を測量すること)が行われました。一方、この頃から、大切にされてきた土地が荒れたり手放されるようになってしまいました。

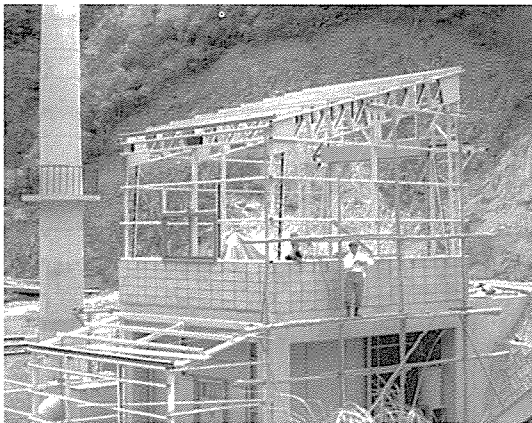
【住みよい町へ】

より住みよい町にするための整備が進められたのもこの時代でした。

ゴミの焼却炉^{しょうきやくろ}は昭和40年(1965)に加賀大津地区^{おおづ}にできたのを初めに、各地区に設置され、焼却炉でゴミ処理を行なうようになりました。昭和49年(1974)にはチェリーロード^{ながら}の長良谷^{だに}に焼却処理施設が完成しました。

昭和42年(1967)には有線放送^{ゆうせんほうそう}がスタート。広報と通話の機能を持ち、町内の様々な情報を放送するようになりました。

この時代には教育・文化施設^{ぶんかしせつ}の建設も進み、役場新庁舎^{ちやうしゃ}(現在の島根支所)・野波中学校・老人福祉センター・中央公民館・保育所などが次々に建てられました。



ゴミ焼却場建設



庁舎建設中(1971年撮影)

【減っていく人口】

昭和40年代後半に入ると、道路が整備^{せいび}され、松江市に近くなったこと、自家用車の普及^{ふきゆう}など生活スタイルの変化に伴って町外へ出て仕事につく人が増えていきました。

また中学・高校卒業後は都会で就職^{しゅうしよく}する人も増え、昭和40年の国勢調査^{こくせいちょうさ}では前回(昭和35年)と比べ人口は5,435人となり、11%も減ってしまいました。



大芦浜地区の海岸道路



交通安全運動(1975年)

(4) 昭和50年代 ～松江島根線開通 近くなった松江市～

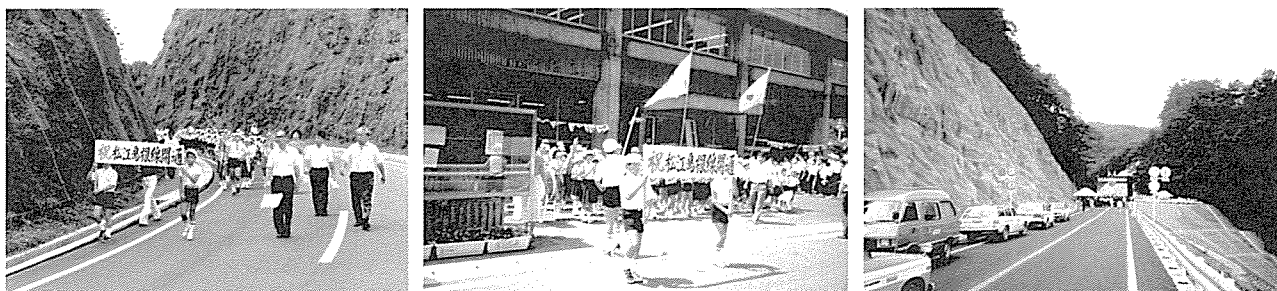
【大きく変わる町の様子】

昭和50年代に入っても大きな事業が続き、大芦・野波公民館、大芦・加賀・野波小学校の新校舎などの公共施設が建設され、町の様子は変わっていきます。

【松江島根線の開通】

その中で一番の大事業だったのが、今、みなさんが利用されている「松江島根線」の開通です。この道路ができるまでは、大芦から海岸線の細い道を通して鹿島町講武を経由して松江駅まで車で約1時間かかっていました。

松江市と島根町を直接結ぶ道路が欲しい、それは戦後から続く町民の願いでした。昭和34年(1959)に認定を受け、昭和36年(1961)に松江市西持田町側で工事が始まり、昭和47年「松江島根線」として改良工事が進められました。持田トンネル、新道トンネルが開通したのは昭和54年(1979)、全線が開通したのは昭和56年(1981)の夏のことです。開通式の日には島根県知事が島根町を訪れ、港では漁船が海上パレードを行い、全町をあげて道路の完成を祝いました。



昭和56年 松江島根線開通時のパレードの様子

松江市までの移動時間は大幅に短縮され、それまで鹿島町御津経由だった路線バスもやがて松江島根線経由となり、通勤・通学に大変便利になりました。

【漁業・定置網】

昭和40年代から50年代にかけて漁で使う網が化繊に変わって強くなり定置網が盛んに行われるようになりました。また、大型底引き網船団の船乗りが多くなりお金が入り、家の建て替えが増えた時代です。

そして時代は昭和から平成へ移り変わっていきます。



おおしきあみ
大敷網の様子

(5) 平成の時代 ～小学校・中学校の移り変わり～

ここでは、昭和から平成にかけての島根町の学校の移り変わりを見てみましょう。

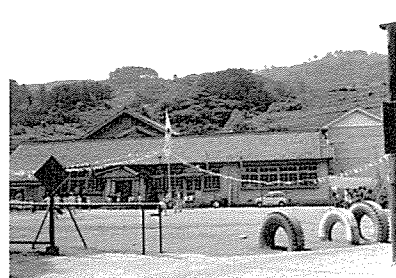
昭和30年頃、町には大芦・加賀・野波それぞれに小・中学校がありました。小学校と中学校は同じ敷地内にあり、^{こうどう}講堂や校庭はいっしょに使っているところもありました。



野波小学校

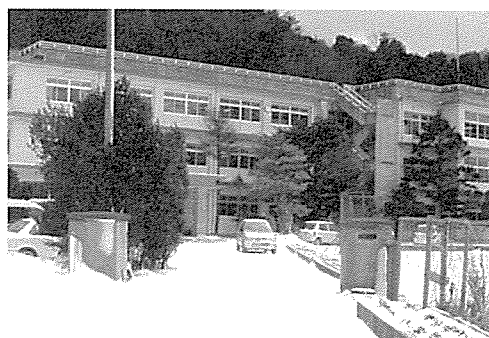


加賀小学校



大芦小学校

昭和38年(1963)、大芦・加賀の2つの中学校が統合し、翌年10月に新築校舎が完成し「島根中学校」が開校しました。単独で残った野波中学校も昭和40年(1965)に新校舎が完成し、それから約40年間は3つの小学校と2つの中学校の時代が続きます。



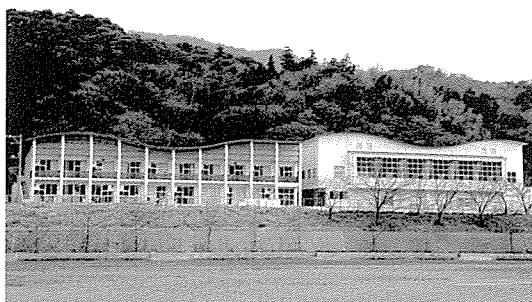
野波中学校



(旧)島根中学校

平成16年(2004)、島根・野波両中学校とも校舎が^{ろうきゅう}老朽化したこと、生徒数が減ってきたこと、そして^{つめざか}詰坂バイパスの完成により距離的に近くなったことから、2つの中学校は統合し新しい島根中学校が開校しました。

平成17年には町内の3つの小学校も統合し島根小学校が開校しました。



現在の島根小学校



現在の島根中学校

【海を活かした町づくりへ】

平成に入ると町では観光に向けて大きな事業が展開されていきます。

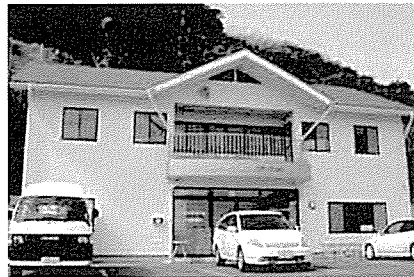
「マリゲートしまね」「マリンハウス加賀」（平成3年）、「マリンプラザしまね」（平成10年）、ダイビング施設「フレンズしまね」（平成13年）、「マリンパーク多古鼻」（平成16年）がオープンし、大型事業が進められました。



マリンプラザしまね



マリンパーク多古鼻



フレンズしまね

平成15年には地域イントラネット「マリンネット」が開始され、現在では光ファイバーを利用した放送とテレビ電話を使用することができます。

【八束郡から松江市に】

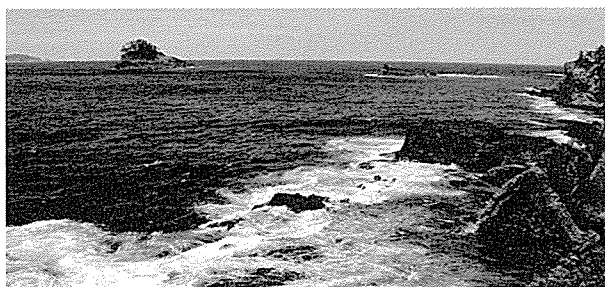
平成17年、島根町は「平成の大合併」により松江市と合併し八束郡島根町から松江市島根町となりました。しかし松江市となった現在も島根町では人口減少、^{じんこうげんしょう}人口減少、^{しょうしこうれいか}少子高齢化など多くの問題をかかえています。

そんな中、これからの島根町を支えてくれる若い力が必要とされています。町技でもあるバスケットボールは毎年優秀な成績を収め町の誇りとなっています。また、昔のように川にホタルを呼び戻そうという活動や、桜の植樹、^{まつが}松枯れに強い松の木の植樹など環境保全の活動も活発に行われるようになってきました。



私たちの住む島根町が、戦争中から現在に至るまで、時代とともにどのように推移してきたか概ね理解できたと思います。

私たちは島根町の歴史と伝統に誇りを持ち、これからもいっそうの進歩・発展を願い、みんなで力を合わせて将来に希望の持てる住みよい町づくりに努めましょう。



3. 島根町の先人たち

福田屋 定五郎 (ふくだや さだごろう)

廻船業者 宝暦3年～天保9年(1753～1838)

加賀浦(現島根町加賀)の田中屋新衛門の二男、天明元年(1781)に分家する。後に門名を福田屋とつけた。定五郎が初めて船を持ったのは寛政2年で三十石積みの中古船を購入。寛政5年には七十石積みの中古船を購入、寛政9年には船問屋の株を買い船持ちとして成功した。文化元年(1804)古い2隻の船を売って百石積みの船を新造した。文化5年に村の年寄役、文化11年に庄屋となった。

金 津 栄三郎 (かなつえいさぶろう)

漁業者 製網技術を改良 嘉永9年～昭和8年(1848～1933)

八束郡加賀村生まれ。

明治25年(1892)漁網に使用する綴網の改良について寝食を忘れて熱心に研究する。とじ網糸を一つ撚りから二つ撚りとすることを発明、網地の耐久力を増す。明治30年の第2回内国水産博覧会に出品。その功績は顕著。

※参考文献 島根県漁業基本調査報告書(児島俊平)

山 崎 大 耕 (やまさきたいこう)

禅僧(臨済宗)・相国寺派管長 明治8年～昭和41年(1875～1969)

松江の士族奥田家に生まれ、明治14年(1881)7歳のとき、松江市の万寿寺に入り修業をした。

明治35年ごろ大芦の瑞光寺住職となり、山崎姓となった。

その後、大正8年(1919)台湾の臨済寺住職となり、翌年台湾総布教監督となった。

大正10年(1921)京都五山の一つ(佛教の臨済宗)、日本の代表的な寺院 相国寺に入った。

厳しい修業が実を結び、昭和8年(1933)相国寺派管長(相国寺派最高位)となった。

昭和19年(1944)に引退した。

小 川 蔵次郎 (おがわ くらじろう)

島根県会議員 ⇒ 衆議院議員 寛永 3 年～昭和 11 年 (1850～1936)

八東郡野波村に生まれる。

明治 22 年 (1889) 野波村長となり八東郡会議員を経て明治 39 年島根県会議員となる。2 期目の明治 45 年県会議員をやめて、衆議院議員に立候補し当選、福岡世徳、恒松隆慶とともに立憲政友会に所属して活躍。身長 5 尺 8 寸 (約 175cm)、体重 20 貫 (約 70kg) 余りという巨漢で草相撲では右に出るものはないと言われ、政界・産業界の名物男として知られた。晩年、松江の枕木山の海蔵庵で老後を送った。

※参考文献 島根県人名事典・島根県議会史・島根県衆議院選挙史

洪 谷 久 (しぶたに ひさし)

島根県医師会顧問・日本学校医会副会長 明治 28 年～昭和 44 年 (1895～1969)

八東郡野波村に生まれる。松江中学を経て東京慈恵会医院医学専門学校を卒業し医師となる。野波村で開業し、その後昭和 14 年に松江市本庄に移り開業。

学校医を長年にわたり勤め、日本学校医会副会長となり、児童・生徒の体力向上を図るなど教育界でも貢献した。知事表彰、文部大臣表彰。

昭和 44 年勲四等瑞宝章を受けた。

将棋五段で県将棋連盟会長も務めた。

松 本 晁 光 (まつもと ちようこう) (本名：正之)

画伯 明治 35 年～平成 9 年 (1902～1997)

広島県に生まれる。2 歳のとき、父の故郷である加賀別所の祖父母と幼少期を過ごし、少年期は松江で過ごした。

小学 6 年生の時に出品した図画がほめられ、絵の道を目指すきっかけになった。

東京美術学校、京都市立絵画専門学校で学ぶ。戦後、日本文化研究所を主宰。

京都大丸などで個展を開催、知恩院、法然寺、出雲大社など社寺へ多数の作品を奉納。

加賀村で、幼少期や関東大震災後、また戦争中疎開をして過ごしたことがある。数々の作品を島根町に寄贈、現在マリンプラザしまねなどに作品が展示されている。

田 中 鶴 尾 (たなか つるお)

底引き網漁業者・漁業振興 明治36年～昭和60年(1903～1985)

大正6年(1917)明神丸^{みょうじんまる}1隻で底引き網漁業^{うた せ あみ}(打瀬網^{そうぎょう})を創業する。島根町の底引き漁業の第一人者である。

大正11年(1922)新船2隻を建造して底引き網をはじめめる。その後、株式会社明神丸を設立。昭和24年(1949)～26年(1951)大芦漁業協同組合 組合長理事を務める。また、島根海区漁業調整委員を務める。

昭和39年(1964)貨物船と小型船を買い取り海運業に乗り出す。

昭和44年(1969)多年にわたる漁業振興^{こうけん}の貢献が認められ、黄綬褒章^{おうじゅほうしょう}を受章した。

※参考資料 しまね町合併30年の歩み

出 口 ミツ子 (でぐち みつこ)

助産師^{じょさん し}・地域婦人会長・観光事業振興 大正3年～平成15年(1914年～2003年)

八束郡加賀村に生まれる。

助産師^{じょさん し}のかたわら、地域婦人会長^{ち いき ふ じんかいちょう}として、冠婚葬祭^{かんこんそうさい}の簡素化^{かんそか}などの生活改善^{せいかつかいぜん}に取り組む。

そのほか、保育所^{かん い すいどう}、簡易水道^{しょうぎく し せつ}、焼却施設^{せつ ち}の設置^{はたら}を町に働きかけ、実現^{じつげん}させた。また、観光事業^{おこ}を興し地域の同志^{どう し}を募り、グラスボート^つなぎさの就航^{しゅうこう}・桂島レストハウス^{かつらしま}の建設を実現。県内外に島根町を広くアピールした。

島根新聞社(現山陰中央新報社)地域開発賞の第1回婦人賞を受賞

※参考資料 合併記念誌「愛するわがまち島根町」(2005.2.28発行 島根町)

山 田 倭 (やまだ しず)

バスケットボール指導者(監督)・元小中学校長 大正14年(1925)八束郡加賀村に生まれる。

昭和20年(1945)9月島根師範学校^{し はんがっこう}卒業後、野波国民学校^{こく민がっこう}に教諭^{きょうゆ}として赴任^{ふにん}。島根町内でバスケットボールを指導^{しどう}し、島根町のバスケットボールの基礎^{きそ}を築く。

加賀小学校5年生の頃、バスケットボールを教わり、島根師範学校^{し はんがっこう}で選手として全国準優勝を果たした。

大芦中学校、加賀中学校、統合後の島根中学校など島根町内の小中学校^{きん む}に勤務^{し はんがっ}し、師範学校^{こう}時代^{じんみんく とお}の人脈を通して町外との交流を図った。バスケットボールを町内各地^{ふ きゅう}に普及させ県内トップレベルへ導いた。

奥 村 健 (おくむら けん)

バスケットボール指導者(監督)・元小学校長 大正15年(1926)八東郡加賀村に生まれる。
教師として島根町内のバスケットボールの普及に尽力し、大芦中学校、野波中学校、島根
中学校を県内トップレベルまでに育てあげた。
専門は国語。大芦小学校校長での在任時、指導が実り昭和59・60年(1984・1985)には学習
研究社全国児童才能開発コンテスト(作文)の部で同校児童の作品が連続して文部大臣賞を
受賞。また、各賞の多数表彰を受けた。

出 口 典 雄 (でぐち のりお)

演出家 劇団シェークスピア・シアター主宰

昭和15年(1940)八東郡加賀村に生まれる。

昭和40年(1965)東京大学文学部美術科卒業。文学座に入座。

昭和47年(1972)劇団四季に移籍。3年後の昭和50年(1975)に劇団シェークスピア・シアター
を旗揚げし『十二夜』の上演をスタート。

昭和53年(1978)紀伊国屋演劇賞(演出部門)を受賞。

昭和56年(1981)一人の演出家によるシェークスピア全37作品の演出・上演を世界で初めて
達成した。現在、劇団シェークスピア・シアター上演のほか全国各地の高校で芸術鑑賞会
としての公演を開催。

金 津 義 彦 (かなつ よしひこ)

フェンシング選手(元オリンピック日本代表)・フェンシング指導者

昭和36年(1961)島根村加賀に生まれる。

加賀小学校・島根中学校時代はバスケットボール部員として過ごす。

松江工業高校に入学してからはフェンシング部に入部し、法政大学に進む。

法政大学3・4年時にはインターカレッジ優勝。昭和57年くにびき国体では役員として貢献。

昭和59年(1984)ロサンゼルスオリンピックに出場する。

昭和60年(1985)鳥取アシックスに入社し、わかとり国体では同競技成年男子を総合優勝に導く。

昭和61年(1986)アジア競技大会ソウル大会 団体第3位

昭和63年(1988)ソウルオリンピックに出場する。

平成2年(1990)アジア競技大会北京大会団体第3位 その後、後進の育成に努めている。

平成元年(1989)島根県体育協会の職員となり現在に至る。

島根町の名所



①加賀の新潜戸

3つの入り口を持つ延長200mの海中洞窟。
佐太大神(さだのおおかみ)誕生の時、母神が金の弓矢を射通してできたと言われています。
詳しくは島根町誌 本編569ページ・資料編240ページで



②加賀の旧潜戸

賽の河原のある洞窟で、亡くなった小さな子供達が積むという石の塔が並びます。
遊覧船を降りて散策 できます。
詳しくは島根町誌 本編575ページ・資料編297ページで



③築島の岩脈

海底火山の噴出物などでさまざまな層が幾重にも岩脈となって断崖に露出し地層学上貴重な存在とされています。
詳しくは島根町誌 本編107ページで



④多古の七ツ穴(沖泊)

高さ50mの多古鼻岬の絶壁にできた大小11の洞窟。
海上からは7つの入り口が見えることから、その名がつけました。
詳しくは島根町誌 資料編197ページで



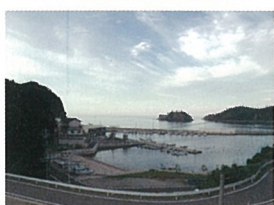
⑤錦ヶ浦(田島灘)

細川幽斎の句にも詠まれた海岸。
大小の島や岩が美しい景色を造り出しています。
詳しくは島根町誌 本編211ページで



⑥須々海海岸(大芦洗たく岩)

岩脈が白く美しいストライプを描いています。
周辺の島々を含めた夕焼けの美しさは格別です。



⑦瀬崎の戌

海を見張る重要な地点に置かれていたのが戌です。
瀬崎の戌は、隠岐の出入船の監視のため数人の防人がいたと言われています。
詳しくは島根町誌 本編132ページで



⑧綱掛の松(瀬崎の殿浦)

鎌倉時代末期、隠岐へ配流されていたが元弘3年(1333)配所を脱出の際、瀬崎の殿浦に船を着け船のとも縄を繋いだ松。
詳しくは島根町誌 本編153ページで



⑨御手洗滝

澄水川の上流部の滝。
神代の頃、天照大神(あまてらすおおみかみ)があまりのきれいな水に喜んで 手を洗ったとの言い伝えがあります。
詳しくは島根町誌 資料編223ページで



⑩桂島の築堤

1790年頃に松江藩によって造られた桂島と櫛島を結ぶ300メートルの防波堤。松江の産物を加賀の港に集め、そこから大阪や北陸方面に船で運ぶために造られました。
詳しくは島根町誌 本編231ページで



⑪加賀城跡(弥山)

弥山の頂上にあった加賀城の跡。10代目城主喜兵衛尉正利は毛利方につき尼子軍との戦いで、たびたび手柄を立てたと言われています。
詳しくは島根町誌 本編173ページで



⑫絵馬(加賀神社)

港町として栄えた加賀の神社には、戦いの様子や武者の姿を描いた「武者絵馬」や船の絵を描いた「船絵馬」など船乗りが寄贈した大きな絵馬が残されています。
詳しくは島根町誌 本編417ページで



⑬チェリーロード

春、市道沿いに、まるでトンネルのような桜並木が5 kmにわたって続きます。
その数約700本。海と桜の共演が楽しめます。
平成22年3月「さくら公園」が完成しました。

島根地区編集委員会

会 長	石 川 光 男		
副会長	山 田 倭		
委 員	石 橋 勉	石 橋 真喜子	小 川 隆 敏
	奥 村 健	佐 藤 一 孝	佐 目 元 子
	高 井 美保子	伊 達 章	永 野 優 子
	湯 原 章		
事務局	島根公民館館長	吉 田 康 治	
	担 当	村 上 孝 子	

協 力

島根小学校 島根中学校 島根地区社会福祉協議会連合会
さし絵提供 石 橋 勉

参考資料

島 根 町 誌 本 編	1987.12.1 発行	島根町教育委員会
資料編	1981.3.2 発行	島根町教育委員会
合併記念誌 愛するわがまち島根町	2005.2.28 発行	島根町

島根町 わがとこ聞きある記

平成22年(2010)3月

編集 島根地区歴史書編集委員会

発行 松江市島根公民館
松江市島根町加賀1414
TEL 0852-85-2301

印刷 (有)高浜印刷
松江市東長江町902-57
TEL 0852-36-9100



